

## 特集 ■ 東日本大震災を振り返って

## 震災と今後の日本



原島 博

Harashima Hiroshi

フェロー

### 1. はじめに

あの3. 11から早や一年が経ちました。今回の大震災の記憶と教訓を未来につなげなければならない、そのためには、一人一人がそれぞれの立場から、そこで何を感じたか、考えたかを語っていかなければならない、皆がいまそう感じています。でも一方で、大震災は過去のことではありません。被災地ではまだ現在進行形です。何を語っても、それは被災地の現実と比べればすべて空しく、絵空事のようにも聞こえてしまいます。いま何かを語ることは勇気が必要とされます。

そのようなとき「震災と今後の日本」というタイトルの原稿依頼を学会の編集委員会からいただきました。これは私にとって余りにも荷が重すぎるタイトルでした。しかし、逃げるわけにはいきません。依頼状には、タイトルはあくまでも「仮」であって、自由に執筆していいとありましたが、あえてそのままのタイトルで執筆することにしました。

ここで、私は特別なことを述べるつもりはありません。新たな主張もありません。おそらくは誰もが感じ、考えていること、それを自分自身のための備忘録として記すことにします。内容が重くなりすぎてしまうので、口語調の文章にあえてしました。お許しいただければ幸いです。

### 2. 戦後日本はどのような時代だったのか？

今後の日本を考えるために、まずはこれまでの日本がどのような時代だったかを簡単に振り返っておきましょう。

個人的なことになりますが、私は1945年の9月、終戦の年に生まれました。日本はその前後で大きくその進

路を変えました。20世紀前半は、日本の国是は軍事大国でした。それが戦後は一変して、安保体制のもとで経済大国を目指すようになりました。戦後の朝鮮戦争がその後押しをしたのです。

#### 2.1 経済成長と地球温暖化

戦後はまさに経済成長がすべてであったと思います。経済成長があれば雇用が確保できます。福祉も可能となります。確かに1955年から1974年まで、約20年にわたった高度経済成長によって、日本人は豊かになりました。GNPも1968年に西独を抜いて世界第二位になりました。

一方で、成長のためには大量消費が大前提となります。消費がなければ経済は成り立ちません。それがいまの経済システムの大前提です。アメリカを中心として大量消費社会が到来しました。日本にも世界の経済を支えるために、内需拡大の圧力がかけられました。

大量消費社会は、エネルギーも大量に消費します。エネルギー需要が爆発的に増加しました。これは結果として地球温暖化をもたらしてしまいました。いまやその対策が人類の生存のために緊急の課題となっています。

#### 2.2 核家族化と地域コミュニティの崩壊

戦後の経済成長は、急速な工業化によって担われました。それは言いかえれば都市への集中でもありました。働き手は都会に集中しました。これにともない地方は過疎地となり、そこは極端な高齢社会となりました。

都会も変わりました。地方から都会に集まった人たちは団地・マンション族となって、核家族が中心になりました。出稼ぎや単身赴任も含む転勤族によって単身世帯も増えました。さらに高度成長を担った日本の産業は、

その核家族化した家庭から父親を奪ってしまいました。「24 時間戦えますか？」というコマーシャルがそれを象徴しています。「24 時間戦えますか？」は、「家庭にいる時間を 0 時間にできますか？」を意味します。残業は当たり前になり、5 時の定時に退社する社員は無能扱いされました。

結果として、産業界は家庭から父親を奪い、ほとんどの家庭を「父親不在家庭」としてしまいました。また地域からも働き盛りの男性を奪ってしまいました。町内会や自治会が有名無実化して、地域コミュニティの結びつきが希薄になっていきました。

### 3. 今回の震災はいかなる問題提起をしたか？

このような時に今回の大震災が起きました。これは私たち日本人に様々な課題をつきつけました。

#### 3.1 天災と人災、そして安全・安心

まずは未曾有の大震災と大津波は、自然が決して優しいことを私たちに思い知らせました。いま、いつ同じ自然災害が起きてもおかしくありません。これまでは想定外であった災害も、今後はすべて想定内としなければなりません。災害を完全には克服することができなかつたら、それを前提とした社会システムを再構築しなければなりません。

原発の事故は、それが天災ではなく人災であるがために、より深刻な問題を私たちに投げかけています。事故の確率が限りなく小さくても、事故が起きたときに地域全体を無人化してしまい、さらには人類の生存を脅かすような人工物の導入は、もともと無理があったのかも知れません。

さらに安全と安心の問題は、人々の心を大きく揺るがしました。科学技術を中心とする専門家不信を招き、一方でネットには様々な情報が流れ、それによる二次被害、三次被害をどう防ぐかも深刻な問題となりました。

#### 3.2 社会システムと文明の見直し

そして、より本質的な問題を私たちに提起しました。それは上で述べた戦後日本のありかたについての見直しです。それは近代という時代の見直しと言ってもいいかもしれません。

原発事故は、私たちにエネルギーの問題を身近に意識させました。実は、今回の事故の直前まで、原子力発電は上で述べた地球温暖化を防ぐ切り札として、その役割が再評価されていたのです。地球温暖化に対処するた

めの最大の難問は、経済成長といかに両立させるかでした。経済を成長させるためにはエネルギーが必要となります。それは CO<sub>2</sub> を大量に排出するものであってはなりません。原子力発電は CO<sub>2</sub> 排出が少ないとされ、経済成長を前提としつつ地球温暖化を避ける切り札として注目されたのです。

今回の事故によって、その切り札の有効性が疑問視されるようになりました。これにより地球温暖化の問題はより深刻になったと言えます。いまの緊急課題は太陽熱や風力などの代替エネルギーの確保です。でもそれは時間がかかります。代替エネルギーのみではこれまで通りの経済成長は到底無理でしょう。

そろそろ物の豊かさを追求した近代文明に別れをつけなければなりません。将来においてそれが必要になることは誰もが感じていたことですが、それが今回の震災で前倒しになったというのが実感です。

#### 3.3 人の繋がりの大切さ

もう一つ今回の大震災で私たちに再認識させたことは、人と人の繋がりの大切さです。戦後日本では地域コミュニティが急速に失われました。地域とは関係を持たない個人主義の時代となり、個人情報保護法がそれに拍車をかけました。

しかし、それでは今回の大震災のような緊急時には対処できないことを、私たちは思い知りました。被災地で、そして避難所で、人々がもっとも頼りとしたのは人と人の繋がりだったのです。それは「絆」という言葉で表現されました。

ネットは人と人を繋ぐメディアです。今回もそれが有効であることが示されました。しかしそれには限界があります。やはり基本は地域における人の繋がりなのです。そのためには、失われてしまった地域コミュニティの再構築が急務です。ネットはむしろそれを支えるものであることが望まれます。

### 4. これからの日本の進路

ここでこれからの日本の進路について言及することは乱暴かもしれませんが、でも、私は思います。日本は変わっていかなければなりません。

#### 4.1 経済の時代から文化の時代へ

すでに述べたように、20 世紀前半は軍事の時代、後半は経済の時代でした。これからもそれでやっていけるでしょうか。1980 年頃、日本はアメリカを追い越すの

ではないかと騒がれたときがありました。でもそれは蜃気楼でした。経済バブルとその崩壊を経て、日本経済の成長は鈍りました。2010年にはGDPは中国に抜かれて世界第三位になりました。近い将来にインドも日本を追い抜くでしょう。

そのような時にあって、日本は何を目指すべきでしょうか。再び中国を追い抜いて世界第二の経済大国になることでしょうか。それはほとんど不可能なことにように思えます。確かに経済は大切です。でも日本はもうそろそろその次を目指すときに来ているような気がしてなりません。おそらく中国を始めとするこれからの経済大国も、日本と同じように早晩その終焉を迎えるでしょう。そのときに、そのそれぞれの国が課題先進国である日本をモデルとするような、そのような日本になって欲しいと思います。

そのキーワードは「文化力」であると考えます。20世紀前半が戦争の時代、後半が経済の時代であったとすれば、21世紀は文化の時代になって欲しいと願っています。

#### 4.2 日本は有利な立場にある。誇るべきものがある

具体的には、これからの日本の課題は「文化による新たな社会づくり」と「文化による新たな生きがいつくり」です。社会作りに関して言えば、まずはモノとエネルギーを消費しない経済システムの構築が急務です。これまでの消費による流通に代わって、文化の流通を中心に据えたシステムが望まれます。これは新たな生きがいつくりにもつながります。消費をベースとした物質的な豊かさではなく、文化による心の豊かさをめざす「人間らしい生き方」の追求です。

考えてみれば日本は有利な立場にあります。その一つは世界に先駆けての高齢社会の到来です。高齢社会を乗り切るためには医療技術も必要ですが、それ以上に大切なのは、高齢者の生きがいつくりです。長生きしても生きがいがないければ人生の意味がありません。逆に生きがいがあれば、高齢者は元気になり、介護は軽減されます。医療費も下がります。

世界は日本を追い形で高齢社会を迎えます。日本が文化の力によって高齢社会を乗り切るモデルを示せば、これからの世界をリードできます。幸い日本は、人生を楽しむための文化とそれを支える産業については先進国です。ゲーム、アニメ、マンガ、カラオケ、パチンコ、これらを私はアフター5産業と呼んでいます。いずれも日本がリードしています。これからは、高齢者の生きが

いを支えるアフター65産業の発展が望まれます。

さらに言えば、物の豊かさを目指す西洋文明に対して、これからはこれとは異なる文明が見直されるようになるでしょう。日本は、もともと東洋文明の歴史があり、しかも東洋の先進国として西洋文明の洗礼も受けてきました。まさにそのような日本は西洋文明と東洋文明が融合して新たな時代を切り拓く、リーダーとしての役割があるのです。

#### 5. おわりに

以上、駆け足でいま私が考えていることを、部分的ですが書き記してみました。今回の震災によって多くの方が亡くなりました。その悲しみを悲しみに終わらせずに、未来につないでいくことが大切です。震災をきっかけとして、いま日本は世界から注目されています。これを教訓にして、新たな21世紀モデルを創造して日本から発信すること、それによって日本が世界から尊敬される国となること、それがいま私たちに求められています。これを、本小文のとりあえずの結論としておきます。

#### 【略歴】

原島 博 (HARASHIMA Hiroshi)

日本バーチャルリアリティ学会 フェロウ

1945年東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年で退職。現在、東京大学名誉教授。女子美術大学と明治大学の客員教授でもある。専門はコミュニケーションの基礎を工学的に探ること。この立場から情報理論、VR、人の顔に興味を持つ。科学と文化の融合にも関心がある。日本VR学会では、理事、監事、会長などを務めた。

(タイトル顔写真撮影 中村年孝)